

「家がいいね」 第91号

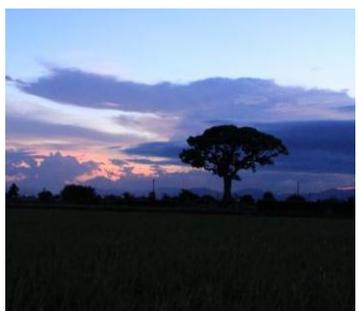
いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2011. 12. 12

新しいカレンダーを用意すると、残りは1枚、1年の締めくくりが近づいていると思えますね。

その生を尊敬する

昔から気になっていた「木」です。若い頃には、星の王子様に書いてあるバオバブの樹ではないかと空想したり、近くまで行ってみたりしました。長太（なご）の大楠と言われ、白子より北に行く



時には近鉄の車窓から楽しみに見えています。長く生きる者に、見守ってもらっているように思えます。11月末、59歳のある医師が急逝されました。もう会えないのと言う実感が、ひしひし迫って来ました。人間とは、もろいものですね。私も今さらのように、朝、起きられる存在であることと感します。誰しも尊敬に値する生があります。

佐藤初女さんに会いにゆく

12月7日は臨時に休診して90歳の初女さんに一期一会の機会を得るべく、山梨に行きました。青森県の弘前市で「森のイスキア」と言う駆け込み寺を



続けておられる方です。相談者のつらい体験を静かに、ただ聴き続け、丁寧な食事でもてなし、落ち着きを取り戻す役を担っておられます。帰る時には手づくりのおむすびを持たせ、鐘の音で送るのです。相談者は、生きる勇気がよみがえっているのに気付きます。初女さんの手は、温かでした。

ホスピス学校にて

この機会を作ってくれたの、在宅ホスピス医の大先輩の内藤いづみさん。家庭科ですと、おむすび作り体験も準備とは！



「いのちをいただく」

今朝もふっくらおいしそうに

炊き上がった

ごはんが輝いている

一粒一粒が呼吸している

毎日はおろか何十年も

食べているのに飽きもせず

食べるたび新鮮な気持ちで

味わえる幸せを

かみしめ今日も感謝で生きる

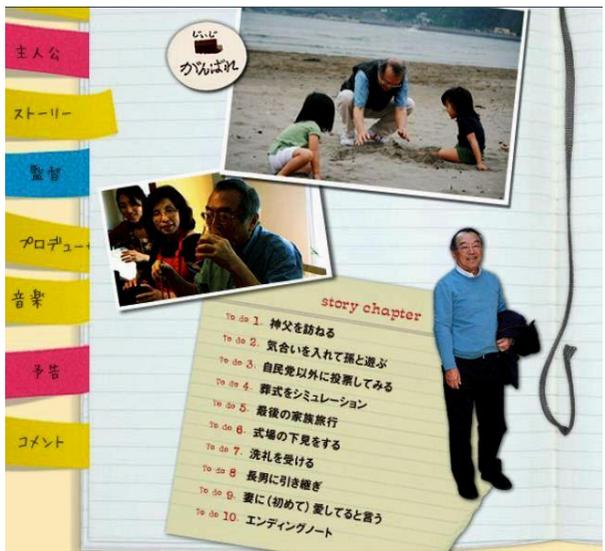
佐藤初女(はつめ)



実は参加者が何度か、「作っている時は何を願うのですか」と質問しますが、初女さんは「何も考えません(食べてもらう相手のことも)」と、答えます。食材という「いのち」に誠実に対応し、私たちへの「いのちの移し替え」を実践されているわけです。

映画「エンディングノート」に感激

普通の(?)映画のような特別な事件は何も起きない。「わたしは上手に死ねるでしょうか」という父と娘の複眼で、普段の生活の進行が描かれる。それが、なぜこんなに喜怒哀楽の感情を揺さぶるのか。家族の壁にカメラが分け入り、ドラマではない生と死の対話を率直に映し出す。家族の姿に動かされるのは在宅医でも経験するが、写真には撮れるものでない。映画のパンフレットからの引用画像での葉のように「とれそうだとれない」絶妙のドキュメント映画なのだと思います。



- 主人公
- ストーリー
- 監督
- プロデュー
- 音楽
- 字幕
- コメント

- story chapter
- To do 1 神父を訪ねる
 - To do 2 気合いを入れて孫と遊ぶ
 - To do 3 自民党以外に投票してみる
 - To do 4 葬式をシミュレーション
 - To do 5 最後の家族旅行
 - To do 6 式場の下見をする
 - To do 7 洗礼を受ける
 - To do 8 長男に引き継ぎ
 - To do 9 妻に(初めて)愛していると告ぐ
 - To do 10 エンディングノート

年末年始のお休みは、

29日(木)～1月3日(火) 休診

この間も訪問患者さんへは24時間対応です